

平安末期の美

大日如来及び四波羅蜜菩薩坐像（重要文化財）



大日如来及び四波羅蜜菩薩坐像

南アルプス市山寺の宝珠寺（ほうしゅうじ）に安置された仏様です。密教において宇宙の中心（または宇宙そのもの）を現すといわれる座高1mほどの「大日如来」を中心に、それより一回り小さい4体の菩薩像が周囲を囲みます。

周りを囲む菩薩像の姿や、それぞれの手が結ぶ印の形は、全国的にも他に例がなく、非常に深い密教の世界を現すといわれ、平成3年に国の重要文化財に指定されました。

そのたたくまいは、非常に繊細で優美な表現で現されます。いずれも腕が細く、華奢（きゃしゃ）な体つきで現され、顔も浅い彫りで、繊細な目鼻立ちが印象的です。衣も薄く、幾重にも布を垂らした腕の飾りなどは非常に華やかです。

このような繊細で華麗な表現は、耽美（たんび）的ともされる平安時代末期の造像の特徴を良く現しているといわれ、12世紀の造立とみられています。

平安時代末期ということで、現在NHK大河ドラマで放映中の平清盛とほぼ同じ時代の造立ということになります。この時代、南アルプス市域を拠点としたのは甲斐源氏の加賀美遠光ですが、これ程のレベルの造像ができる人物はこの地には他になく、年代を考えるとやはり、この仏様を造らせたのが加賀美遠光であった可能性は高いといえます。加賀美氏の、中央にも充分通用する教養と文化水準の高さが偲ばれます。



お寺に安置される様子。通常は宝珠寺の収蔵庫に大切に安置されています。



宝珠寺 中央にみえる立派な松の木も県指定の天然記念物となっています。



美術院国宝修理所職員による梱包の様子。厳重に梱包され京都へ旅立ちました。



宝珠寺の毘沙門天像（県指定文化財）



大日如来の腕飾り。とても繊細な彫り方です。

また、宝珠寺には、高さ2mを越える巨大な「毘沙門天像（県指定文化財）」があります。こちらは遠光の息子である小笠原長清が造らせたものといわれています。

南アルプス市に現在2900体ほどあると推定されている仏像の中でも、国の重要文化財となっているのは、今回紹介したこの大日如来及び四波羅蜜菩薩坐像と甲西地区古長禅寺の夢窓国師坐像（南北朝時代）の2件だけです。

大日如来及び四波羅蜜菩薩坐像は現在、各像の座る台座に耐震上の不安があることに加え、長い歴史の中で傷んだ部分を修復するため、京都の美術院 国宝修理所に移されて修復作業が行なわれています。南アルプス市には平成24年度末に戻ってくる予定です。

※今回紹介した作例は、いずれも信仰の対象であり現在一般にひろく公開されているものではありません。